

ロコースト文学の分析を通じて「表象可能性」の問題を検討し続けたことも、真摯さへの努力の一環であり、日本の文脈でも大いに参考となるはずだ。また岡田泰平「記憶の政治」研究を振りかえる(『歴史評論』八〇八)は、「慰安婦」問題を念頭に、ピエール・ノラ編「記憶の場」(日本語版二〇二二)の日本での受容史を検証し、同書の企図を東アジアで批判的に活かしていくための越境的な研究計画を提起している。

さらに、今さら普遍性かといぶかる向きに対しては、スタン・バックリモース(谷崎総・高橋明史訳『ヘーゲルとハイチ』(法天出版))の力強い提言の参照を請いたい。同書は、ヘーゲルの主と奴の弁証法が、同時代のハイチ奴隷反乱を意識して造形されながら、実際の記述ではその意識が抑圧されていく過程を証して、哲学史の理論/西洋中心主義を批判するスリリングな読みを展開する。最終的に著者は、一頂対立のいずれかを取るのではなく、共犯的な対立の枠組みによって不可視化されたものから問い質す「普遍的な歴史」の可能性を擁護する。

もちろん、歴史研究が直面する「現場」は、いつももっと具体的だ。歴史学研究会編『歴史を社会に活かす』(東大出版会)は、歴史学と社会との接触領域で起こっている「楽しむ・学ぶ・伝える」観る「歴史実践」に、研究主体も巻き込まれつつ応答する様子だが、若手の現場報告を中心に立体的に説かれている。前述の『現代歴史学の成果と課題』と併せ読むならば、従来あった「国民の歴史意識」論や歴史教育論のバージョンアップとも位置づけられよう。また東京歴史科学研究会編『歴史を学ぶ人々のために』

(岩波書店)は、同会による同じ題で四度目の、しかし約三〇年ぶりの刊行だが、そこには現状診断にもとづく新しい読み手へのよびかけと研究者の責任の果たし方が現れている。「発信力を取り戻せるか」と自らに問うた『メトロポリタン史学』二三号の特集「現実社会と歴史学・考古学」も、そのような取り組みの一翼を担うものだろう。

以上の概観から浮かびあがるのは、現代における歴史研究者の職能と社会的責任とはなにかという、歴史理論の(集合的な)「主体」を考えると、避けては通れぬ主題である。ここで、たとえばハリ・コリンズ(鈴木俊洋訳)『我々みんなが科学の専門家なのか?』(法天出版)から学べることは少なくない。科学(者)の信頼性をめぐる同時代史でもある本書で、著者はタイトルの問いに対して慎重に否を唱える。科学者コミュニティの規範的復権という本書の提言は陳腐に聞こえるかもしれないが、「歴史学の専門家」であろうとすれば、これを対岸の火事と見るわけにはいかない。(戸邊秀明)

## 日本

### 考古

#### 1 旧石器時代

二〇一七年の旧石器時代を対象とする研究では、発掘調査に基づく成果のみならず各地に蓄積された資料を活かした考察や新たな方法論の提示がなされた。

日本の旧石器研究を先導してきた安藤政雄の古希を記念した論集が刊行され(『安藤政雄先生旧石器時代の知恵と技術の考古学』同論文集刊行委員会編、雄山閣)、師事を受けた研究者らが論考を発表した。石器型式学からの旧石器研究への展望(竹園俊樹「旧石器時代研究の進むべき道」)や細石刃の定義に関する考察(高倉純「細石刃と細石刃技術」)などの学説史的考察以外にも、地域資料の理解へ肉薄する論考がある。吉川耕太郎は秋田県縄手下遺跡の形成過程の解明を目的とし、出土した珪質頁岩の個別別資料に対応する産出地を特定するための産状調査を河川沿いに実施し、産出地点を異にする石材が遺跡内異所空間に応じて消費されたことを明らかにした(縄手下遺跡にみる石器原料の獲得消費活動と遺跡形成)。鈴

木次郎は相模野台地の磨石状礫に着目し、安山岩の多用、扁平形状、磨耗程度、礫群との補完性などの観点から、寒冷気候下における皮革処理の増加と関連つけた(相模野台地とその周辺地域における富士玄武岩の利用(一))。氏家敏之はA.T降灰以後の瀬戸内系ナイフ形石器を伴う石器群を二つの時期に区分し、ナイフ形石器の形態・サイズ・刃角の分析から、「井島第二群石器」が出土した香川県井島遺跡第二層の石器群を終末期に位置づけている(瀬戸内地域の終末期ナイフ形石器)。杉原敏之は大陸からのヒトの移住先や文化的接触地となる北西九州の尖頭器石器群に焦点をおき、尖頭器の型式分布、多久産サヌカイトの利用、轉半島南部の剥片尖頭器の形態、石刃技術の発達などの多角的側面から剥片尖頭器の出現過程を考察している(剥片尖頭器の構造と展開)。金恩正は韓国の垂楊介、ジングヌル、龍山遺の諸遺跡出土の剥片尖頭器(スベチルゲ)を観察し、破損状態、加工部位の分析に基づき刺突具としての機能と再利用の変異を明確に指摘した(朝鮮半島におけるスベチルゲの形態的屬性と機能)。大谷寛は細石刃核の形態分類に基づき韓国の細石刃石器群の編年表を提示し、石材利用や九州・北海道との対比によって東アジア細石器文化の消長を考

察している(韓国細石器文化における製作技術と変容)。諸星良一は群馬県芳賀町遺跡の接合資料分析による素材利用の検討に基づき、リチャード・モアランの定義した「靦加技法」の見直しに取り組んだ(靦加型細石刃石核の石核素材の生産工程)。

新たな概説書を上梓した安藤政雄は、旧移民と新移民という異系統集団を列島の特徴的な石器群の出現・展開に対応させ、旧石器時代文化の成立を論じた(『日本旧石器時代の起源と系譜』雄山閣)。大塚宜明はナイフ形石器の展開から列島の旧石器文化史の構築を試みている(『日本列島におけるナイフ形石器文化の生成』北大出版会)。

安齋正人が編集した『理論考古学の実践』(同成社)は『I理論篇』と『II実践篇』の二巻からなり、日本考古学における理論的研究の現状を示している。欧米を中心とする多様な理論展開や特定理論の適用範囲・哲学的背景・課題を考察した狭義の理論的考察は少なく、むしろすでに実績のある研究者個人の方法論的アプローチによる各論が多い。沢田敦はナイフ形石器の形態、石材利用、各種彫刻刀形石器の出現頻度を検討し、東北日本に分布する杉久保系石器群が形成される背景に集団内・間の接触をとらえた(『石器群の形成と集団接触』同1)。型式分布や地域性といった石器群から抽出されるパターンを、集団間の情報伝達という文化伝達様式から説明することを通して地域研究と社会理論の架橋を試みた好例である。五十嵐彰は、石器の接合という事象が空間という次元で表れた時の意味づけについて、論理的に考えうる関係と経験的な石器接合関係からみた分布パターンの双方から解きほぐ

検討した結果、刃部の一部が再加工されつつも多様な用途に用いられた融通性の高い道具であったことを指摘している(『最終氷期最寒冷期の北海道における石刃石器群の使用痕分析』同)。日本旧石器学会第一五回大会のシンポジウム「使用痕分析を統合した行動研究の展開」では、使用痕研究の到達点が示された。また、痕跡研究としての体系化や人間行動を明らかにするための方法的有効性も語られた。その具体例に御堂島正による論考がある(『使用痕跡分析を超えて』『理論考古学の実践I』)。考古資料の痕跡をめぐる新たな研究領域も展望できる一方で、痕跡研究の理論的枠組みとされる「中範囲理論」の適用範囲についてはルイス・ヒンフォードらの原典の忘却・曲解や関連する理論的考察の不在を危惧する。

石器製作段階の剥離面の痕跡の理解に向けて、大場正善は押圧による頁岩製石器の製作を実施し、押圧による剥離痕跡を同定するための基準を示した(『押圧の痕跡』『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』9)。実験者の視点から多彩な押圧具や固定法・保持・負荷の方法などの詳細を検討した剥離痕跡形成に関する身体技法の優れた考察である。同じく実験者の視点をもちながらも具体的な旧石器を対象とした好例として、岩永雅彦による佐賀県多久三年山と茶園原遺跡より出土した尖頭器の形態的多様性の解明に向けた製作実験によるアプローチがある(『佐賀県多久出土の尖頭器の研究』『旧石器時代の知恵と技術の考古学』)。

特定の石器群や石器器種を対象とした論考が目立つ。鈴木美保は左側縁に彫刀面をもつ上が屋型彫器に類する一群の彫刻刀形石器について、特定の石器集中からの出土も考慮し、左利きの個人

している(接合空間論)同)。遺跡形成過程で自然要因による移動作用が最小であったと評価できる場合、五十嵐の提示した接合空間のモデルと分析は多様な人間行動を抽出する有用な方法となるだろう。池谷信之は神津島産黒曜石が後期旧石器時代初頭から本州へと供給される状況を地質的・理化学的分析に基づいて示し、海峡を越えたヒトの移動を可能とする海上渡航能力を現生人類の行動と位置づけた(『旧石器時代の神津島産黒曜石と現生人類の海上渡航』『理論考古学の実践II』)。須藤隆司は、日本列島東北部の後期旧石器時代の石刃技術の成立過程を調整技術の未発達な分割型と調整技術が発達した調整型の二つの石刃技術体系への変化ととらえ、列島内集団の技術革新を想定した(『石刃技術革新』同)。田村隆は、放射性炭素年代値を利用して、旧石器時代の日本列島の人口変動を検討し、変動の背景にある気候変動とそれへの地域集団の応答から文化変化を評価した(『日本列島後期旧石器時代の新遷移』同)。これまで集約された放射性炭素年代値の分布頻度を人口動態ととらえグローバルな気候変動へ関連づける方法論は、今後テフクロロクロロロジーによる石器群編年や既存の文化編年案との対比を通じてより包括的な議論を生むだろう。

石器の使用痕を中心とする痕跡研究が活発である。御堂島正は、石器の埋没後の表面変化を明らかにするため黒曜石製石器の土・砂との摩擦実験を実施し、ランダムな線状痕跡や摩擦面の形成、使用による光沢面の減退などを報告した(『黒曜石製石器に形成された使用痕跡の物理的表裏変化』『旧石器研究』一三)。岩瀬彬・中沢祐一は、北海道最終氷期最寒冷期の石刃石器を器種別・刃部単位で

による製作であった可能性を述べている(下原・富士見町遺跡出土の「類上層型彫器」に関する考察』『ラーファイター』三八)。藤山龍造は二〇〇二年に長沼正樹が体系化した画面調整石器群(画面調整石器群研究序説『考古学研究』四九)から、北方系細石刃石器群と尖頭器石器群を抽出し、尖頭器の製作が浪費的な石材消費を許容する安定した石材供給によって成立する性質にあり、画面調整技術の運用は移動生活における効率性とは関連しないことを指摘した(『バイオエニス・リタクション仮説とその評価』『考古学』一六)。尾崎沙羅は北海道の忍路子・舟底形・有舌尖頭器石器群における尖頭器の製作工程を分析し、原産地と原産地から離れた地域に残される石器群の間で石材利用・消費に対照的な違いがあることを指摘し、行動形態の異なる集団の存在を想定している(『北海道・後期旧石器時代における尖頭器製作と石材運用』『考古学集刊』一三)。いずれの議論も長沼が注目した画面調整技術や尖頭器を石器群間の比較に用いる視点が有用であることを示唆しており、石材構成のデータ化や原産地分析を取り入れた石材利用と移動に関する議論を深めていくことが期待される。そうした点で金成大郎による北海道の地形を考慮した黒曜石の運搬経路の推定は注目される(『旧石器時代の黒曜石利用について』『旧石器時代の知恵と技術の考古学』)。尾田謙好は北海道の細石刃石器群に出現する小形舟底形石器を、丸滑型細石刃核を伴う石器群と比較しつつ製作・運用技術を分析し、舟底形石器が意図的な折断や器種転用なども含む、状況に応じて加工された道具であったことを推論した(『舟底形石器の特性と行動論的効果』『旧石器研究』一三)。これまで等閑視

されてきた舟底形石器の機能・用途の一端を示唆する成果である。

北海道を除く列島規模で広がりを見せる瀬戸内技法に代表される国府石器群の展開過程が『考古学ジャーナル』六九八号で議論された。A.T降灰以降とされる瀬戸内技法の展開について、麻柄一志は剥片剥離工程や調整技術の変化から国府石器群の時間的な遷遷を考察した(『日本海側の地域』)。安山岩系石材との結びつきも瀬戸内技法の特徴であるが、橋本勝雄は関東地方では遠隔地田米の多様な石材が用いられていることを指摘する(『東日本における国府系石器群の地域的構想』)。絹川一徳は大阪平野のA.T下位から上位にかけての横剥き技術を概観し、A.T降灰以降の瀬戸内技法が盛行する時期には、瀬戸内技法以外の工程によって翼状剥片や石核が供給されている翠島園遺跡や長原遺跡などに対して、群家今城遺跡(地点)のような瀬戸内技法による国府系ナイフ形石器の一括製作がなされた状況があったことを指摘している(『国府石器群の成立と展開』)。松本茂は九州の国府石器群の成立背景を、「小城」上回廊と呼ぶA.T降灰後の瀬戸内・西北九州地域の交流の結果と考えている(『九州の国府石器群』)。国府石器群は中心である近畿・瀬戸内地域から周辺へ広がる考古学的分布パターンをもつため、旧石器社会が垣間見える対象である。分析資料も限定できることから、パターン形成の要因とされる伝播の史的・生態的なプロセスに関与したヒトの拡散と地域集団間の技術伝達との区別を問うような課題設定を期待したい。

四万年前を遡る初源期の存在評価は埋蔵事件以後の学界でも見解が分かれるが、佐藤宏之は「中小形剥片石器」の生産などの共

通性から長野県竹佐中原遺跡A地点石器群や広島県下本谷遺跡の石器群を後期旧石器への移行期と評価する(『日本列島の中期/後期旧石器時代移行期に関する再検討』『ラーファイター』三八)。岩手県遠野市で開催された東北日本の旧石器文化を語る会では「金取遺跡と東アジアの前期旧石器」と題したシンポジウムが行われ、東アジアの「前期旧石器」の研究状況(王幼平「中国河南省鄭州地区における旧石器考古学の新展開および金取遺跡に対する初歩的私見」、洪惠媛「韓半島の前・中期旧石器」共に『第三回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』同会編集・発行)、遺跡の意義(武田聖史・小向啓明「岩手県遠野市金取遺跡の調査」同)、石器に利用されたホルンフェルスの産地推定(中村甲克「金取遺跡における石器の石材利用」同)、金取石器群と韓国の前期旧石器との技術的関連性(長井謙治「東アジアの中の金取」同)などが示された。四万年前を遡る確実な石器群の検出を目的とした福岡県辻田遺跡の試掘調査では阿蘇4火砕流堆積物とその上のローム層が確認された(長井編『辻田遺跡』東北芸術工科大学・東北文化研究センター)。初源期の石器群を明確にするためには、石器の人為性の吟味も欠かせない。山田しようは上峯篤史が開発した「斑晶観察法」が剥離面の剥離方向の推定に有効であることを指摘し、風化度の検討などによって、剥離面が人為であるか否かを検討するという石器認定の方向性を示している(『斑晶観察法の有効性』『旧石器考古学』八二)。貝殻状の割れ口を示す石英斑晶を用いることの有効性を高評価しており、資料の人為・非人為判別に関する議論の深化が期待される。

石器群に比べて研究される機会が少ない礫群であるが、新たな

成果が提示された。鈴木忠司・織笠明子・徳永裕は、千葉県東林跡遺跡出土礫群構成礫と石器との徹底的な接合作業を通して関連づけられた、七か所の礫群とそれらに重複する石器分布を生活基盤の単位と認定した(『東林跡遺跡上層層の礫・石器分布とその関係』『鎌ヶ谷市史研究』三〇)。これまで存在のみが知られるにすぎなかった埼玉県砂川遺跡A地点の礫群の検出状態と円形の掘り込みの写真、被熱痕跡をもつチャート製石核と剥片が紹介された(鈴木忠司・織笠明子・徳永裕「砂川一九六八年、補遺『礫群』」『考古学集刊』一三三)。礫の存在を予感させるため、礫群を含めた砂川遺跡研究の更新が焦眉の課題である。古田幹は、鈴木らの石蒸し料理実験のデータを参照し、食物調理のために利用されたと考えられる礫群の中でも利用可能な大形礫が抜き出されて新たな礫群として集積された後、さらに利用されるプロセスを提示した。具体例として、埼玉県泉山・富士谷遺跡第一六地区第四文化層出土の三四方所の礫群について接合関係と重量区分のデータから検討した結果、礫の再利用が複合することによって多数の礫群が形成されたことを示した(『礫の使用状況と礫群の形成』『古代文化』六九一)。また、同遺跡二一地区の二つの礫群の接合関係と破損・赤化状態から大形礫の選り分けと再利用を明らかにし、礫群形成の前後関係を推定した(『礫群の形成状況の推定』同六九一三)。古田の一連の論考は、実験データと膨大な労力を要する礫の観察・接合から得たデータを統合して遺跡形成を明らかにした労作であり、礫群の形成過程分析で今後手本とすべき研究である。保坂康夫は、古田が提示した礫群が多数回使用によって形成されたことを前提とし、長期居

住された遺跡や集団数が多かった遺跡群の抜き取り頻度が高かったという仮説を、南関東地方の礫群における定形礫保有率の定量的な検討によって検証している(『礫群の使用回数論から形成回数論へ』同)。すでに礫群の資料分析法は明示され、礫群研究は旧石器時代の新たな集落論の構築を目指す段階にある。その意味でも、保管体制の問題などから出土礫が廃棄される状況(鈴木忠司「若狭時代礫群研究の現在」に寄せて)同は改善したい。

石器から旧石器文化の担い手を議論するには限界もあるが、列島に居住した集団の生物学的データを得られる有望な地域に琉球列島の石灰岩地帯がある。約二万年前の多数の後期更新世人間が出土し古環境情報も回収された石垣島の白保芋根田原洞穴遺跡の発掘調査報告書が刊行された(仲摩久彦編『白保芋根田原洞穴遺跡』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書八五))。第八三回日本考古学協会総会では同遺跡の調査成果が報告され(セッション3「白保芋根田原洞穴遺跡の調査と研究」)、雑誌特集も組まれた(『よみがえる先史沖縄の人びと』『科学』八七)。洞穴内堆積物の分析からは複雑な堆積過程が明らかにされ、鍾乳石を用いた年代測定や古環境推定が期待される(石原与四郎・吉村和久「白保芋根田原洞穴遺跡はどのようにできたか」同)。また、人骨の埋葬形態や分布からは洞穴内の「風葬」が推定されている(山崎礼子・土肥直美「更新世の墓域は語る」同)。稲田孝司らは石垣島・西表島には利用可能な石器石材が分布するものの、洞穴から石器が検出されていない状況から墓域の見解を支持する(佐藤宏之「白保芋根田原洞穴遺跡の考古学的成果」同、稲田孝司・佐藤宏之「白保芋根田原洞穴遺跡の考古学的検討」

『日本考古学協会第八回総会研究発表要旨』。

ウェナー・グレン財団によるホモ・サピエンスのアジアへの拡散に関するシンポジウムの内容が『カレント・アンソロポロジー』誌の特集号として刊行された (Current Anthropology, 58 [Supplement, 17])。日本列島を含む東アジアへの更新世人類の拡散過程の解明は人類史的課題であり、古人類学、遺伝人類学、年代学、古環境学とともに旧石器考古学の果たす役割は小さくない。アジアのホモ・サピエンスの生物学的・文化的多様性をめぐっては二〇一一年に海部陽介らが組織したシンポジウム以来国際的な共通テーマとなっている。その中で日本列島の旧石器時代への関心は高まりつつあり、国内の旧石器研究を国際的水準の議論に導く努力が問われる。後進育成を含めた教育・研究体制の見直しも真剣に議論すべき時期に来ているだろう。(中沢祐一)

## 二 縄文時代

一般社会と縄文 豊田亜紀子の『土偶のリアル』(武蔵野弘鑑、山川出版社)、『土偶界へようこそ』(山川出版社)、『知られざる縄文ライフ』(武蔵野弘鑑、スナキョ編、誠文堂新光社)、あるいは総合誌『エリカ』四九一六号の「総特集 縄文」などの一般書の刊行が続くように、「縄文」への注目は高い。こうした中、金沢大学国際文化資源学センターは、連続セミナー「考古学と現代社会」の記録集を刊行した(吉田泰幸/ジョン・アートル編 Japanese Archaeological Dialogues)。多くは縄文と現代を題材としたもので、講演と対談の記録に吉田泰幸の解説が付された良好

の洞窟遺跡最前線」明治大学での研究会(「国史跡が拓く縄文の世界」)、中央大学での研究会(「文化の始まりを探る 土器の始まり・文字の始まり」)、公開セミナー(「定住までの長い道のり」)かながわ考古学財団ほか、『伊勢湾考古』二六号での愛知県二股貝塚五〇周年記念特集などの検討が行われた。

一方、弥生時代・弥生文化との関係では、昨年は、設楽博「編季刊考古学」二二六号「特集 弥生文化のはじまり」同「弥生文化形成論」(斎藤房、寺前直人「文明に抗した弥生の人びと」(吉川弘文館)、小林青樹「倭人の祭祀考古学」(新泉社)が相次いで刊行された。後二者はいずれも、弥生時代に特徴的とされた祭祀儀礼の源流の一部を縄文時代に由来するものとしてその系譜を追う部分が含まれ、その境界をめぐる論点を提供している。弥生再葬墓に関する二つのシンポジウムの記録集(『やちりけん』二)と予稿集(『なだっぺ』泉坂下) 菅隆大京市教委)で、縄文との連続性が指摘され、後述のとおり谷口康浩も再葬に注目している。金子昭彦は東北地方を中心とした弥生時代の土偶を検討した(『弥生時代の縄文土偶』『書森考古学』二五)。

大塚達朗は山内清男の「縄文文化・縄文土器」の一系統説は無根拠であり、土器出現期まで遡る時代概念を「ハイパー縄文」として繰り返し批判している(『消費される縄文文化』Japanese Archaeological Dialogues)。「山内清男の縄文文化モデルの難点」『アルケイア』二二、「わたしたちは何を語っているのか、科学が物語か?」『呷呷土器とその周辺』東海縄文研究会)。前者の講演録には大塚と吉田泰幸・小林正史らとの対談や吉田の解説が付されており、早期

な手引きとなっている。

「縄文」の枠組み 二〇〇〇年代を通じて継続している「縄文」の枠組みをめぐる問題については、前後の時代との関係、日本列島周辺域との関係、「縄文」の一体性など、多様な論点があり(今村啓爾の入門書『縄文文化』(ニエーサイエンス社)でも現状が整理されている)、昨年も様々な議論が行われた。山田康弘・国立歴史民俗博物館編『縄文時代』(吉川弘文館)は副題「その枠組み・文化・社会をどう捉えるか?」のとおり、上記の課題について、各論者による展望が示された。空間範囲については同書において福田正宏がサハリンと北海道縄文の差異を認めた一方、伊藤慎一は北琉球の独自性を強調している。水ノ江利和も列島外との関係を検討するため、早期石刃鏃文化に伴う右製装身具を取り上げ、大陸・サハリンとの関係性を論じている(『縄文時代早期の北海道と周辺地域との関係性について』『縄文時代』二八)。

縄文時代の始まりについては、山形県日回洞窟の調査 新潟県本ノ木遺跡の調査研究を振り返る企画展と座談会(津南町教委「本ノ木」『座談会六(年目の本ノ木遺跡 要旨集)』)など草創期遺跡の調査研究に加え、千葉県取掛西貝塚や各地の洞窟、岩陰遺跡の調査および再整理(愛媛県歴史文化博物館『久万高原町土器岩陰遺跡出土遺物』海部陽介・坂上和弘・河野礼子「岩洞穴」(長崎県佐世保市)出土の縄文時代早・前期人骨 Anthropological Science (JS), 125-1、米田大輔・大塚真之「長崎県佐世保市岩洞穴から出土した縄文早期人骨群の政業・産業同位体比と放射性炭素年代」同)などで早期遺跡への注目が高まる中、栃原岩陰遺跡フェスティバル二〇一七「日本中部

以降の一体性についても議論が及んでいる。

小林謙一は各時期の時間幅の研究をまとめ、再計算した年代値を示した(『縄文時代の表年代』同成社)。

土器型式と地域間関係 三〇年にわたって群馬県水上温泉を会場に、時期ごとに周辺地域の土器を検討してきた縄文セミナーが終幕を迎えた(谷藤保彦・関根慎二編『縄文前期中葉の型式間交渉の諸問題』同会)。同会では、各地の土器編年の成果を持ち寄り、併行関係を議論することから始まり、その過程で従来の「型式」よりも狭い型式学的まとまりを「類型」と設定して土器群の詳細な位置づけを図る方向性を示してきた。近年では、残鉢や注口土器も扱ったが、最後の二回は前期の「型式間交渉」をテーマに掲げていた。また、東海縄文研究会は中期後半呷呷式(呷呷式土器とその周辺)、九州縄文研究会は後期中葉北久根山式(西平式(九州の縄文時代後期中葉土器))をテーマにシンポジウムを開催した。また、『物質文化』九七号で「縄文時代前期土器型式群研究の新展望」が特集された。いずれも地域内に異なった様相の土器が混在することなどをどのように説明するか、という問題意識を共有している。

これらのうち評者が注目するのは定量化・視覚化されたデータ提示である。東海縄文研究会の発表のうち、白川綾は北白川式・東海系・北陸系の遺跡ごとの構成比をセリエーション図で示した(「北白川式の地域性」)。大網信長は帯状区画、連続弧線文・渦巻文・田文などの口縁部文様を分類して関東西部から東海までの構成比をセリエーション図で示した。大網は文様分類の形を